

留学生のための日本語アカデミックライティングラボ 2021 年度活動報告書

2022年3月31日

杉原健・松元実環・倉橋佑輔・田村豪・土井冬樹・山下泰生・齊藤優・中村徳仁・井上高輔

神戸大学国際教育総合センター

留学生のための日本語アカデミックライティングラボ 2021年度活動報告書

【目次】

1. はじめに	1
2. 2021年度ラボ活動の概要	1
2. 1. 実施の体制	1
2. 2. 新人受入れと新人研修	4
2. 3. 定期ミーティング	8
3. 実施の状況	9
3. 1. 利用のデータ	10
3. 2. 利用者アンケート	14
4. ラボの振り返り	14
4. 1. 前期の振り返り	14
4. 2. 後期の振り返り	16
5. 補論（勤務時間外の有志によるオンライン勉強会について）	19
6. おわりに	21

【参考文献】

【資料】

- 1 セッション観察・振り返りシート
- 2 利用者アンケート項目・結果
- 3 ウェルカムシート
- 4 まとめシート
- 5 ポスター(2021年度前期・後期)

【執筆者と執筆項目】

杉原健	(神戸大学国際文化学部卒業生、東京学芸大学学務部国際課 専門研究員)	: 2.1節①②
松元実環	(神戸大学国際文化学研究科博士後期課程院生)	: 2.1節③④
倉橋佑輔	(神戸大学国際文化学研究科博士前期課程修了生)	: 2.3節
田村豪	(神戸大学人文学研究科博士後期課程院生)	: 3.1節①②
土井冬樹	(神戸大学国際文化学研究科博士後期課程院生)	: 3.1節③④
山下泰生	(神戸大学人文学研究科博士後期課程院生)	: 4.1節
齊藤優	(神戸大学人文学研究科博士後期課程院生)	: 4.2節
中村徳仁	(神戸大学国際文化学部卒業生、京都大学大学院 人間・環境学研究科博士後期課程院生)	: 5節
井上高輔	(神戸大学国際教育総合センター特命助教)	: 1節、2.2節、 3.2節、6節

1. はじめに

本報告書は、神戸大学国際教育総合センターが日本学生支援機構委託事業として受託した「兵庫国際交流会館における国際交流拠点推進事業」(通称 G-Navi、事業期間:2019～2023年度)の一環として実施された「留学生のための日本語アカデミックライティングラボ」の2021年度の活動について報告するものである。「兵庫国際交流会館における国際交流拠点推進事業」は、「高度グローバル人材をめざした国際教育」を大きなテーマとし、より具体的なテーマに基づくプログラム群からなっている。ライティングラボは「研究・学習支援」のための取り組みの一つであり、兵庫県下の留学生を対象とした日本語による学術的な文章の作成支援と、留学生を支援するチューターの養成を目的としている。

本報告書は、2021年度チューターとして勤務した神戸大学の大学院生・修了生・卒業生8名と、ライティングラボを含む事業のコーディネートを担当した教員である井上高輔(国際教育総合センター)が、これまでの活動報告書の内容・体裁を基本的に踏襲しながら執筆した。

ライティングラボは2017年度から実施されている。2017、2018年度の活動については森田(2019)、2019年度の活動については井上ほか(2020)、2020年度前期の活動については森田(2021)、2020年度全体の活動については松元ほか(2021)でそれぞれ報告されている。ラボの取り組みの背景にある理念や指導法の詳細については、それらを参照されたい。

以下、第2節で2021年度のラボの実施体制と活動について説明した上で、第3節で実施の状況について述べ、第4節でチューターの振り返りについて報告する。第5節では、補論として、今年度有志のチューターで実施した勉強会について報告する。なお、本報告書で割合データを示す際は、小数点第二位を四捨五入している。

2. 2021年度ラボ活動の概要

本節では最初に2021年度のラボにおける実施体制を概観した上で、ライティングラボの原則をおさえる。後半では文章作成支援にあたるチューターの組織を概説した上で、本ラボにて実際に行われているセッションの流れを述べる。

2. 1. 実施の体制

①基本事項(場所、対象、時間帯、チューター数、期間)

2021年度のラボは2020年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を大きく受けた。2019年度までは兵庫国際交流会館を拠点とした対面での活動を基軸としていたが、2020年度はZoomとGoogle Driveを使用したオンラインでの活動へ移行した。2021年度も引き続き、オンラインで

の活動となった。

支援対象者は「兵庫県下の大学等の留学生」となっている。これは主に、兵庫県に所在地を置く大学や大学院等に在籍する、日本語を第二言語とする者を意味する。「留学生」と書かれているものの、対象となる過程は「学部、修士、博士、交換留学生、研究生、教員／研究者、その他」となっていることから、利用資格は学籍を有する者に必ずしも限定されない。また、オンラインでの実施という要因もあり、兵庫県外や国外からの利用者が2020年度に続き見られた。セッション中の会話で使用する媒介言語は基本的に日本語を想定している。ただし、日本語運用能力の習熟度が高くない利用者を排除するものではない。

チューターの勤務時間は事前準備と事後の振り返りを含み、1日あたり15時30分から19時30分までの4時間を基本としている。セッションは1コマにつき45分であり、1日あたり3コマ(16時～16時45分、17時～17時45分、18時～18時45分)設定されている。各コマの間は15分空いており、この時間を指導記録用フォームである「まとめシート」の記入や休憩、利用者の入れ替わりなどに充てる。2019年度以前と2020年度以降で勤務時間が変更になった理由は2020年度の報告書(松元ほか 2021:3)にも記載されている通り、大学のキャンパスから兵庫国際交流会館への移動が不要になったため、および大学院生チューターの負担を勘案したためである(森田 2021:24)。

【表1】は2021年度に活動したチューターの数を示している。「経験者」は当該の学期の時点で既に1学期以上チューターとしての勤務経験を有している者であり、「新人」はその学期に初めてチューターとして活動を始めた者を意味する。後期は週に2日担当するチューターがいたため、合計チューターの数と実際の人数に差がある。また、授業等との兼ね合いで2コマ目からセッションを担当しはじめるチューターもいたが、表中には示していない。

【表1:2021年度のチューター数】

	チューターの総数	各曜日のチューター数		
前期	6人(経験者4、新人2)	月曜2人(新人1)	火曜2人(新人1)	金曜2人
後期	8人(経験者6、新人2)	月曜4人(新人1)	火曜3人(新人1)	金曜2人

※カッコ内の数は内数

なお実際の利用件数や利用者の属性、課題の性質、セッションにおける検討事項といったデータは第3節にて扱っている。

②利用の原則

本ライティングラボにおいて支援対象となる文章の種類は、2019年度・2020年度と同様に、日本

語の授業において課された作文、講義・演習のレポート、論文(学位論文・投稿論文)、発表の資料(配布レジュメやプレゼンテーションのスライド)、その他の文章(研究計画書など)といった、日本語で書かれた学術的な活動に係る文章である。就職活動に際したエントリーシートや履歴書など、学術的な活動に関連しないとみなされる文章は、本ラボでは扱わない。

ラボを利用する際には、利用希望者はG-Naviウェブサイトのオンラインフォームからセッションを予約する必要がある。セッションまでにメールに文書を添付して送付した上で、セッション当日はZoomミーティングルームに入室する。利用者1名につき1日1コマが可能枠として設定されている。2019年度までは当日の時点で空きがある場合には2コマ連続の利用を認めていたが、2020年度以降は原則として2コマ連続のセッションは実施していない。

文章チュータリングの理念に係る点は井上ほか(2020)や松元ほか(2021)でも述べられている通り、「書き手のオーナーシップを護りながら自立した「書き手を育てる」ことである(佐渡島・太田編 2013:2-10)。この理念に沿って、文章作成の様々な段階においてチューターは書き手である利用者と一方的な添削にならないように対話を行いながら、文章作成の様々な段階を支援する。

③チューターの組織(属性、勤務方法、ミーティング、研修、空き時間の活動)

2021年度のライティングラボを組織したチューターは、神戸大学大学院の国際文化学研究科所属学生および元所属学生、人文学研究科所属学生、京都大学大学院の人間・環境学研究科に所属している学生である。

チューターは、担当曜日の15時30分に「留学生のための日本語アカデミックライティングラボ」のZoomミーティングに入室し、予約・資料等の確認を行う。全員で予約情報の概要(専門分野・ライティングラボ利用歴等)を確認し、担当を決める、あるいは、あらかじめ割り振られた担当の確認をする。担当者決定・確認後は、各チューターが個人ファイルに目を通す、引き継ぎを行うなどしながら、1コマ目開始まで待機する。3コマ目終了後は、全員でその日のセッションに関する情報共有を行い、各チューターの「まとめシート」の記入が終わり次第、これをオンライン上で共有し、19時30分に退勤する。

2021年度の前期は、ライティングラボ開始(利用者の受入れ)前の時期にミーティングを行った。ラボ開始前の2週間の各勤務曜日にオンラインで行われた研修では、オンラインでのセッションの実施要領の確認と、ライティングラボの実施体制、ルール、指導の理念、新人チュータートレーニングの内容・ライティングの要素に関する知識等を紹介し、新人チューターとの質疑応答や相談を行った。

また、2021年度前期ラボ実施期間中は、週1回の定期ミーティングを行った。定期ミーティングでは利用者情報の共有や、セッション・新人チュータートレーニングの中で生じた問題についての相

談を行った。また、文献研究やワークを通じて、他機関におけるアカデミックライティングに関する活動を取り上げたり、分野別の書き方の違いといったテーマについて検討した。

2021年度後期ラボ実施期間中は、計5回のミーティングを行った。主に文献研究やワークを通して、文章チュータリングに関する理解を深めたり、日常のセッションにおける課題解決の糸口を探ったりした。

セッションの担当のないコマ(空き時間)の活動としては、セッション観察、個人ファイルのチェックによるセッション準備、書籍やネットを利用したライティング関連の資料収集・読解、セッションや文章についての検討などを行った。

④指導(セッション)の流れ

オンライン化以降、45分間のセッションの流れは、おおむね、次の通りである。

まず、セッション開始前に、チューターは予約情報と、(利用歴がある場合)「個人ファイル」により、利用者の情報を確認する。以前のセッションで扱った「ウェルカムシート」や「まとめシート」、文章等に目を通す。また同日勤務のチューターがその利用者を担当した、あるいはセッションを観察した経験があれば、チューター同士で指導の方法や文章の内容について検討する。

セッション開始後は、利用者とチューターの双方が、予約時に利用者が記入した項目に基づいた「ウェルカムシート」によって課題の種類、段階および利用者が検討したい点を確認する(導入)。次に、文章を一読して問題点をチェックし(文章診断)、セッションの目標や問題の優先順位を決める(目標設定)。次いで、利用者の意図や改善策を引き出す対話を行いながら、ライティングの各要素を意識しつつ文章の検討をすすめる(文章検討)。セッション終了間際には、チューターは「まとめ」として、扱った内容や今後すべきことを確認する。また、必要に応じて、Google ドキュメントのURLを送付した。

セッション終了後、チューターは「まとめシート」に指導の内容を記録し、使用した文章やメモとともにGoogle Drive上のファイルに保管する。教員からメモの入った文章ファイルとアンケートを送付する。

2. 2. 新人受入れと新人研修

本節では、今年度の新人チューター受け入れと新人チューター研修について説明する。今年度、新人チューターの受け入れ人数は、前期2名、後期2名であった。年度内に2回、新人チューター受け入れ、新人チューター研修のタイミングがあったことになる。

①新人受入れの背景と新人研修の内容

今年度のラボでは、前年度まで実施したことのない、「後期からの新人チューターの受け入れ」を実施した。背景として、2021年度当初の計画から見て、後期の勤務チューター募集時に、若干の人数的余裕が生まれていたことがある。2021年度当初の計画では、「前期8名、後期8名」を勤務チューターとして予定していたが、実際に前期に勤務したのは6名であり、その内、前期から引き続いて後期にも勤務希望を出したのは、5名に止まった。

前年度までは、「一学期間以上、ラボ勤務から離れていた経験者チューターが後期から再び勤務を始める」というパターンはあったが¹、ラボ勤務経験ゼロの新人チューターを後期から受け入れたのは初であった。

今年度の新人チューター研修は、既有知識や勤務中に体験的に得た情報を整理しつつ、そこから新しい知識へ理解を広げていくような流れで行った。そのような流れとしたのは、それが理解、学習の流れとして自然、あるいは無理がないだろうと判断したことが大きいですが、それだけでなく、松元ほか(2021)で以下のように語られていることを意識し設計したという面もある。

多様な背景(属性、専門分野、能力)を持つ留学生の書き手に対して、「全てのチューターが同じアプローチでライティング支援を行なう」ことが、ラボにおける文章作成支援の目的とはならないはずである。(p. 26)

すなわち、チューターが共通で持つべき知識にのみ意識を集中させるのではなく、共通で持つべき知識は押さえつつ、チューターそれぞれが持つ個性を摘んでしまわないようにという意識もあった。はじめから型にはめ込んでいくのではなく、新人チューターが元々持っている能力を踏まえたという意識である。

具体的な研修活動としては、前期・後期ともに以下のものを基本事項として実施した。

- 模擬セッションの観察
- 模擬セッションでの利用者役
- セッション観察
- 「新人チューター研修ワークシート」2種を通した、「アカデミックライティングの諸要素」と「文章チュータリングや留学生とのやり取り」の把握

¹ 今年度もあった。

模擬セッションや実際のセッションの観察、体験を通して、セッションの流れや求められる姿勢、使用される方法、アカデミックライティングに関する知識をある程度把握し、それをワークシートで整理・展開することで、必要と思われる知識の獲得を試みた。

なお、模擬セッションは、経験者チューターが利用者受け入れ前の肩慣らしとして実施しているチューター同士のセッションである。毎学期、曜日ごとの勤務が始まってから1～2週間程度は、利用者を受け入れずに、勤務の流れの確認やセッションの肩慣らしなど、全チューター対象の研修期間を設けている。チューターは、自身が執筆中、あるいは過去に執筆した学術文章を対象文章として、模擬セッションを行う。

模擬セッションの観察は、利用者役がラボの理念・姿勢・方法を理解しているチューターである、日本語母語話者である、という点で実際のセッションとは性質が異なるが、セッションの流れ自体は異なるものでないので、流れを把握することができる。また、非母語話者対象のセッションの性質については把握できないものの、文章チュータリングの理念・姿勢・方法について把握できる機会が多いのではないかという特徴もある。対して実際のセッションの観察は、セッションの流れ、ラボの理念・姿勢・方法についてはもちろん、非母語話者とのコミュニケーション方法についても気づきを得る機会となる。

セッションの観察中、新人チューターは「セッション観察・振り返りシート」(巻末の【資料1】)に記入を進める。観察後、記入を終えた「セッション観察・振り返りシート」を経験者チューター・教員とともに見ながら、気づいたことを共有する。これによって、セッションの基本的な流れや時間の使い方については把握することができる。加えて、チューターの用いる方法について気づいたことを確認し、その意図やねらいについて話し合うことで、方法そのものだけでなく、その背景となっているチューターとして求められる姿勢やラボの理念についての理解を深めていく。

模擬セッションで利用者役になることは、観察と同様にセッションの基本的な流れを把握したり文章チュータリングの理念・姿勢・方法についての理解を深めることにもつながるが、それだけでなく、利用者側の視点を得られる機会ともなる。

一定数セッション観察を体験した新人チューターは、「新人チューター研修ワークシート」を用いて、知識の整理・展開を行った。「アカデミックライティングの諸要素」と「文章チュータリングや留学生とのやり取り」について、既有知識及びセッション観察の体験で得た知識をメモ・整理し、教員と内容を確認するとともに、教員からの質問や説明を通して、必要と考えられる知識をおさえた。

②新人チューターの感想と相談内容

今年度、新人チューター研修を受けた4名については、後期の終盤期に、研修内容について感想や意見を述べてもらった。まず、とりあえずどのような感想・意見が挙げられたかを紹介する。その後、そこから発展的に話し合われた今後の方針について記述する。

研修内容・手順については、手厚いが、先にいろいろと「方法」を学ぶのは、実感を伴いにくい、頭でっかちになるという面もあるという意見が挙げられた。すなわち、観察を行うことと実際にセッションを行うことにはギャップがあったと感じたとのことである。加えて、観察が続き、実際のセッション担当までの時期が長くなると、それだけ心理的なプレッシャーになったのではという声もあった。

対して、早々に模擬セッションを担当してしまうと、ラボの理念・姿勢・方法とは違う我流が身についてしまうのではという意見も挙げられた。理念・姿勢・方法を確認しながらやってみるのと、まだほとんど理解できていない段階でやってみるのでは差があり、悪い方へはたらく恐れはないかという心配である。

話題は変わって、ワークシートの内容については、様式を簡素にしていたためだろうと思われるが、「どういう記述が求められているのか最初戸惑った」という声があった。また、「この場合自分だったらこう言うが経験者チューターなら何と言うか」が聞ける機会がほしいという声もあった。

これら感想・意見から発展的に今後の方針について話し合われた。おそらく模擬セッションのチューター側を体験するタイミングを多かれ少なかれ早めに行えるようにした方が良く、ワークシート等で知識を整理する際は、質問を今回よりも具体的にした方が良く、「この場合自分だったらこう言うが経験者チューターなら何と言うか」を聞ける機会を作った方が良く、といったことが見えてきた。

模擬セッションのチューター側を体験するタイミングについては、チューターの既有知識や性格の個人差を踏まえ、どれくらいのタイミングで実施するか本人の感覚にあわせられるよう、ある程度時期に幅を持たせるのが良いのでは、ということも見えてきた。

また、これに併せ、20分程度の短めの模擬セッションから始める、経験者チューターと2人でチューター側をやってみるという方法も提案された。これらは、これまでよりも早めに模擬セッションを体験できるようにする方策であると同時に、心理的なハードルを下げる効果も見込まれる。

「この場合自分だったらこう言うが経験者チューターなら何と言うか」について相談する機会は、主に定期ミーティングで設けることができると考えられる。比較的初期の段階から取り入れることで、ラボの理念・姿勢・方法を着実に身につけていけるのではないだろうか。

2. 3. 定期ミーティング

2021年度は1年を通して定期ミーティングを行ったが、曜日や時間、参加率等、前期と後期で異なる点もある。以下、前期と後期それぞれの期間中に行った定期ミーティングについて、その詳細を述べる。

①前期の定期ミーティング

2021年度前期は毎週木曜日の12時20分～13時20分に定期ミーティングを行った。参加人数は基本的には6名であったが、5名または7名の回もあった。

前期の定期ミーティングの主な活動内容は、各曜日の活動内容や利用者情報の共有、参考資料の読解・情報共有による研修、セッションで使用できる資料集やマニュアルの作成についての検討であった。

各曜日の活動内容や利用者情報の共有は、各チューターが自身の勤務曜日以外のラボの活動状況を把握することを目的として行われた。この活動は、各チューターがセッションを担当する際の、スムーズなセッションの進行にもつながった。

参考資料の読解・情報共有による研修は、ミーティング参加者が選んだライティングや日本語教育に関する論文資料を用いて行った。論文資料はライティングセンターにおける留学生に対する日本語学術文章作成支援を扱ったものではなかったため、その内容全てを直接ラボの活動に活かすことは難しいと考えられるが、いずれの論文資料にもラボの活動に役立てられそうな記述があり、本研修は今後のラボの活動を考えていく上で有益であったと言える。

セッションで使用できる資料集やマニュアルの作成についての検討は、セッションをスムーズに進めていくためにそうした資料集やマニュアルがあった方が良いという声もあり、行われた。資料集に記載する資料としては、各学会の投稿規定やスタイルガイド、日本語の表現や文法に関する資料等が挙げられた。

②後期の定期ミーティング

2021年度後期は全5回の定期ミーティングを2～3週間に1回の頻度で、月曜日または金曜日の13時～15時に行った。1回あたりの時間が2時間と長くなったため、多くの時間を必要とするような内容も扱うことが可能となった。参加人数は最も多い回で8名、最も少ない回で4名と、ばらつきがあった。

後期の定期ミーティングでは、全5回のうち4回(第2回～第5回)において、佐渡島・太田編(2013)を参考資料とし、各チューターのチュータリングの質向上のため、ワークショップとディスカッションを行った。ミーティングの大まかな流れとしては、まず議題について各チューターの考えやそれま

で実践してきたことをまとめ、次に参考資料を読み、その後各チューターが感想を述べたり、チューター同士で話し合ったりした。

第1回のミーティングでは、各チューターの背景やビリーフを紹介し合い、すり合わせる活動を行った。各チューターの基本的なプロフィールを知り、他人の文章を見るにあたって大切に思うこと、あるいはアカデミックライティングについて大切だと思うことは何かを話し合うことで、今後の連携の基礎を築いた。

第2回のミーティングでは、セッション内でチューターが行う「質問」に焦点を当てた。まず、なぜ質問をするのか、また普段どのような質問を用いているかといった点について、各チューターの考えや経験を参加者全員で共有した。次に、参考資料を読み、各チューターの感想を共有した。最後にディスカッションを行い、この回に扱った内容がラボの活動にどのように活かそうか検討した。

第3回のミーティングでは、前半は「褒めること」について、後半は「沈黙」について、ワークショップとディスカッションを行った。前回扱った「質問」と同様、「褒めること」と「沈黙」も実際のセッション内ではよく見られるが、どのようにすればこれらを活かしてセッションを行えるか、参考資料を読み検討した。

第4回のミーティングでは、「文章チュータリングの理念」に焦点を当て、ラボでのライティング支援がどうあるべきかを検討した。ラボの活動は文章添削サービスとは異なるものであるが、セッション内で表現や文法の問題を扱うことは多々ある。そうした問題を扱う際、文章チュータリングの理念を意識し、一方的な文章添削にならないようにセッションを行うことが、チューターには求められる。この回では、そのような問題意識のもと、文章チュータリングの理念や、理念に沿った実践例を確認した。

第5回のミーティングでは、「締め切り間際の文章」と「ページ数の多い文章」への対応について検討した。ラボでは、これら2つの性質を持った文章をセッションで扱うことも少なくないため、チューターにもそうした文章への適切な対処が求められる。1セッション45分という限られた時間の中でどのようにセッションを進めていくことが望ましいか考える上で、この回のミーティングで取り上げた内容は有益であると考えられる。

3. 実施の状況

本節ではまず、セッションの実施状況について、利用者のデータをもとにまとめる。そして、利用者に回答してもらったアンケートの結果について述べる。

3. 1. 利用のデータ

①利用件数と稼働率

ラボの各期間の利用件数と稼働率は【表2】の通りである。2021年度は前期・後期ともに利用件数が前年度の同時期より増加した。稼働率も一昨年度、昨年度よりも増加している。

前期の利用者は34名、延べ利用件数は90件、稼働率は約66.2%であった。昨年度前期(19名・延べ58件利用・稼働率約56.9%)に比して活発な利用があったと言える。また後期の利用者は43名、延べ利用件数は149件、稼働率は約66.8%であった。昨年度後期(33名・延べ102件利用・稼働率約46.4%)に比して活発な利用があったと言える。

【表2:ラボの各期間の利用件数と稼働率】

期間	設置セッション数 (回)	利用件数 (件)	稼働率 (%)
2017年度前期	114	48	42.1%
2017年度後期	114	133	116.7%
2018年度前期	204	102	50.0%
2018年度後期	304	235	77.3%
2019年度前期	270	68	25.2%
2019年度後期	342	205	59.9%
2020年度前期	102	58	56.9%
2020年度後期	222	103	46.4%
2021年度前期	136	90	66.2%
2021年度後期	223	149	66.8%
計	2031	1191	58.6%

前期の月単位での利用率は、【表3】の通りである。なお、5月は1日のみの設定だったので、6月に組み入れて計算している。5月31日から6月29日の間が最も高かった(92.5%)。逆に7月2日から7月30日の間は最も利用率が低かった(48.3%)。

【表3:前期の月単位での利用率】

期間	利用延べ数	設置セッション数	利用率
5/31～6/29	49	53	92.5%
7/2～7/30	29	60	48.3%
8/2～8/13	12	20	60.0%

※5月は1日のみの設定だったので、6月に組み入れている。

後期の月単位での利用率は、【表4】の通りである。12月3日から12月27日の間が最も高かった(79.3%)。逆に2月1日から2月8日の間は最も利用率が低かった(32.1%)。

【表4:後期の月単位での利用率】

期間	利用延べ数	設置セッション数	利用率
11/5～11/30	53	72	73.6%
12/3～12/27	46	58	79.3%
1/7～1/31	41	65	63.1%
2/1～2/8	9	28	32.1%

②利用者の属性

利用者の所属大学、所属部局、課程、出身国、住居は【表5】の通りである(カッコ内は%、件数ベース)。

【表5:利用者の所属大学、所属部局、課程、出身国、住居】

所属大学	神戸大学(87.3)、甲南大学(3.1)、その他(9.5)
所属部局 (神戸大学のみ)	国際文化学(25.4)、経営学(20.6)、人文学(12.7)、法学(12.8)、 経済学(11.1)、海事科学(3.2)、人間発達(1.6)
課程	修士(44.4)、博士(22.2)、研究生(20.6)、学部(9.5)、交換留学生(1.6)、 教員／研究者(1.6)
出身	中国(69.0)、台湾(13.5)、韓国(5.0)、その他(11.9)
住居	兵庫国際交流会館(8.8)、その他(91.2)

利用者の特徴としては、9割弱が神戸大学に所属する学生・院生であった。専門分野は人文・社会科学系が中心であったが、神戸大学海事科学研究科の学生の利用も見られた。課程では博

士・修士・研究生の利用が主であり、全体の8割以上を占めた。その他には、学部生の利用も6件あり、交換留学生、教員／研究者の利用がそれぞれ1件あった。神戸大学以外の大学では、甲南大学経営学部、兵庫教育大学学校教育研究科の学生・院生の利用があった。また少数ながら県外の大学からも利用があった。

出身は中国からの留学生が最も多く、その次に台湾、韓国出身の利用者が多かった。その他の地域からは、ベトナム、インドネシア、ロシア、アメリカ、ブラジル、ミャンマー、フランスといった国からの利用者もいた。

③課題の性質

ラボに持ち込まれた文章の種類は【表6】、文章の段階は【表7】の通りである。それぞれ前期と後期で傾向が異なっていることがわかる。文章の種類は論文(修士論文・投稿論文・博士論文・卒業論文)が最も多く、次いで講義・演習の課題(レポート・作文)、発表資料と続いた。前期と後期での大きな違いは、後期ではレポートの件数が減り、修士論文の件数が増加したことである。文章の段階は全体では「ほぼ完成」が58.2%、「途中」が39.7%であり、「アウトライン」や「ブレインストーミング」の段階のものは少数であった。課題の文字数の平均値は、前期は8623字、後期は15034字であり、前期と後期で差があった。後期に向けて「途中」段階のものが増え、さらに文字数が増えたことは、修士論文を扱う件数が増えたことに起因すると考えられる。

【表6: 文章の種類】

文章の種類	前期	後期	合計
修士論文	6.9%	36.5%	24.9%
投稿論文	19.8%	19.2%	19.5%
発表資料	16.8%	12.8%	14.4%
博士論文	15.8%	10.9%	12.8%
レポート	14.9%	3.2%	7.8%
作文	4.0%	1.9%	2.7%
卒業論文	0.0%	0.6%	0.4%
その他	21.8%	14.7%	17.5%

【表7: 文章の段階】

文章の段階	前期	後期	合計
ほぼ完成	63.3%	55.0%	58.2%
途中	32.2%	44.3%	39.7%
アウトライン	0%	0%	0%
ブレイン ストー ミング	4.4%	0.7%	2.1%

④セッションにおける検討事項

セッションにおける「利用者の検討希望箇所」(構成比は件数ベース、複数回答あり)を【表8】に、「実際に検討した点」(構成比は指摘数ベース)を【表9】に示した。前節の課題の性質と異なり、前期と後期で大きな差はなかったため、ここでは年間を通した値のみ示す。【表8】の「利用者の検討希望箇所」は、利用者がセッション開始前に「ウェルカムシート」に記入した内容であり、【表9】の「実際に検討した点」は、チューターがセッション終了後に「まとめシート」に記入した内容である。「まとめシート」の記入欄は「ウェルカムシート」に完全に対応しているわけではなく、項目が細分化されている。セッションの展開によっては、利用者が検討を希望する点以外にも検討する場合があるため、「利用者の検討希望箇所」と「実際に検討した点」の構成比は異なる。とはいえ、表現と文法の検討が多く期待されていることに対して、「実際に検討した点」では、語句の明確さや学術的文章表現、主述のねじれ、文法的事項などが多く検討されており、比較的用户の希望に沿ったセッションが行われていると言える。

【表8:利用者の検討希望箇所】

利用者の検討希望箇所	構成比
構成	7.5%
内容	9.7%
表現	36.6%
文法	40.0%
引用・参考文献	5.5%
その他	0.7%

【表9:実際に検討した点】

実際に検討した点		構成比
文章全体の骨格	ブレインストーミング/アウトライン	0.6%
	文章全体のテーマや問い	3.6%
	構成と構成要素	5.0%
段落や文の関係	パラグラフ・ライティング	3.4%
	内容(複数の事柄の関係/段落や文の抽象度)	4.2%
	接続表現	6.8%
一つの文や単語の問題	キーワード/語句の明確さ	16.5%
	学術的文章表現	10.2%
	一文一義/主述のねじれ/文の長さ	17.1%
	そのほかの文法的事項	21.9%
引用・参考文献		3.2%
その他		7.6%

3. 2. 利用者アンケート

ラボでは、セッション終了後、利用者に任意でアンケートの回答をお願いしている。今年度の回収数は153件(前期57件、後期96件)、回収率は64.0%(前期63.3%、後期64.4%)であった。前年度の回収率が通年で68.9%であったのに対し、今年度は4.9%減少した。質問項目および回答結果は本報告書末の【資料2】を参照されたい。

アンケート結果の傾向は、前年度同様おおむねポジティブな回答が多く、数値的には前年度とあまり差がないように見える。記述欄では、「セッションの時間を長くしてほしい」という意見や、「セッションの時間が短く感じる」「文章を事前に読んでおいてほしい」といった意見があった。前年度、「セッションの時間を長くしてほしい」という意見が多かったことと同様の傾向がみられるわけだが、より詳しく言えば、単純に時間を長くしてほしいという意見と、セッションの内容をより効率的にしてほしいという意見に分けてみることができるだろう。また、昨年度同様、セッションの良かった点やチューターへの感謝を述べる利用者もいた。

4. ラボの振り返り

本ラボでは、各学期の勤務期間終了時に、各チューターが専用の「振り返りシート」を用いて、当該学期の振り返り記録を作成している。本節では、2021年度のライティングラボの活動に対する各チューターの振り返りを紹介する。観点として、「①チュータリングについて」、「②ラボ全体の運営について」の2つに分け、以下でまとめることとする。

4. 1. 前期の振り返り

ここでは、前期の振り返りについて紹介する。前期分の振り返りシートは計6名分である。

以下、各チューターの振り返りを2項目に分けて紹介し、2021年度前期の活動をまとめるものである。

①チュータリングについて

まず「チューターとして、自分ができるようになったこと」の項目では、チュータリングの時間と質のバランスを意識して、セッションを行えるようになった点に6名の所感の共通点があるだろう。たとえば、「構成や内容に踏み込んだ対話を増やすことができた」、利用者の思考の整理のため「音読を取り入れた」、あるいは「残り時間を意識しながら」セッションを行うようになったといった所感がこれに当たる。あるいは本年度から勤務を開始したチューターであれば、「セッション全体の流れを把握し」、文章検討に入るまでの段階をこなせるようになったということで、時間と質のバランスをとるための第一歩を固められたということがある。

また昨年度に引き続き、前期の活動もオンラインでの実施であったため、この点を配慮した取り組みを行ったチューターもいた。たとえば、相手の通信環境や使用デバイスなどの確認はオンライン時代のセッションにおいてはその都度確認するべきであろう。一方で、参考資料を取り入れたセッションの実施についても言及されているが、これはオンライン化したことでインターネット上の資料や各種電子資料の共有が容易になったためであると考えられる。

次に「チューターとして、自分ができるようになりたいこと、難しいこと」(課題)で挙げられた点をまとめると、おおむね次の2点に集約される。(1)「目標の再設定」の実施、(2)内容に踏み込んだセッションの実施である。

(1)から説明すると、セッション開始時に利用者を交えて設定する各回の目標は、勤務年数に関わらず課題として残りやすい性質を持つようである。たとえば、2年ほど勤務を続けているチューターでも「セッションでの冒頭部分で全体の目標を利用者と交渉しながら設定することが依然として難しい」とあるとか、「文章検討を開始する前に、こちらから今回やることを具体的に確認・積極的に提示できるようになりたい」といった所感を持っている。

(2)については、利用者の希望と表裏一体となる課題である。あるチューターも書くように、このラボの「利用者側は表現・文法について検討を希望することが多い」という現状がある中で、内容や構成に踏み込んだセッションを組み立てることはえてして難しいことが多かった様子である。利用者本位のセッションを目指すあまり、利用者が希望しない点については結果としておざなりになってしまいうようである。あるいはラボの方針に忠実であると構成や内容といった全体的な検討に踏み切れない回もあったとのことである。

②ラボ全体の運営について

この点については、「ラボの利用者の減少」が起こっているという点に関心が集まった。たとえば、「学期の最後のほうは利用者が少なかったので、宣伝活動に少し力を割いても良いのかもしれない」、「後半で利用者がやや減少したように感じたので、さらにPRしてもよいかもしれない」、「学期後半になると同じ人を担当することが多くなり、利用者も減っていったので、宣伝をもう少ししたいと感じた」といった意見である。

これ以外の各所感は以下に列挙することで報告文に代えるものとする。

- ・多様な分野から広くチューターを集め、布陣を充実させた方が良い。
- ・「活動報告書」以外にも、活動内容をアウトプットできるような機会があれば良い。
- ・模擬セッションを3回踏まえてから、実戦に臨めたことは良かった。

- ・特に初回利用者にとっては日本語チェックとアカデミックライティング指導との違いを理解するのは難しいと感じた。本ラボのHPには添削ではないと書いてあるが、初回の利用者には少し丁寧に説明したほうがいいのかもしいし、どのように提示するかは難しいが、HPでも実例などがあるとより利用者もどのようなサービスなのかイメージしやすいかもしれない。
- ・私が経験した利用者は東アジア出身者に限られていたので、わりかし文化的にも近く、語学レベルも高い人ばかりだった。なので、ここまでで得た指導経験がどこまで普遍的で広くあてはまることなのかはわからない。(母語話者と留学生のあいだにもやはり指導上の大きい差異があると思う)
- ・ラボの活動をオンラインで行うようになって2年目ということもあり、アプリケーションの操作やファイルの共有等についてはスムーズにできているように思う。しかし、チューター同士のコミュニケーションについては、対面に比べるとスムーズではないように感じることもある。

4. 2. 後期の振り返り

ここでは、2021年度後期チューターの振り返りについてまとめる。後期分の振り返りシートは計8名分である。

①チュータリングについて

チュータリングに関する振り返りでは、「チューターとして、自分ができるようになったこと」、「チューターとして、自分ができるようになりたいこと、難しいこと」(課題)について紹介する。

「チューターとして、自分ができるようになったこと」について、セッションの時間配分について取り上げたい。まずは、セッション冒頭で行う目標の設定とその交渉に関する振り返りをみていく。チューターはセッションの冒頭で利用者に対してそのセッションでの目標を提案する。具体的には、利用者の文章をどこまで、どのように検討していくのかについて、利用者との交渉する。こうした目標設定とその交渉について、チューターの声を紹介したい。

・これまでは、利用者に求められるままにセッションを行ってきたが、今期はセッションの目標を利用者と確認しながら進めることで、持ち込まれた文章の改善に必要な作業は何かを意識してセッションを行うことができた。

・どこをめがけてその日のセッションを進めるか、セッション冒頭での状況把握に時間を割くようにした。また、目標の設定(+時には再設定)も意識的に口に出して伝えるようにした。

チューターがこうした工夫を行うことで、45分という限られたセッション時間ではあるが、密度の濃い検討がなされていると言えるだろう。

加えて、セッション終盤に行われている取り組みを紹介したい。振り返りでは、セッション終盤に「まとめ」の時間をとることができるようになったという声が複数挙げられていた。

- ・セッションの最後に、その日やったことを振り返りまとめる時間を設けるようにした。
- ・セッション開始40分頃から、終わりに向かって話をまとめ出すように多少意識できるようになった。
- ・セッションの終わりパートで、今後の課題や次回以降の利用の仕方について軽く相談できるようになった。

このように、チューターはセッションの終わり方について工夫を凝らしていることがわかる。まとめの時間をとることによって、検討したことを振り返り、次の作業へとつながるような支援を行うことに目が向けられていると言えるだろう。

「チューターとして、自分ができるようになりたいこと、難しいこと」(課題)について、日本語が母語ではない留学生を対象とするラボの活動においては、セッションがネイティブチェックばかりになりかねないという難しさに直面することがしばしばある。

- ・これまでも課題であったが、今期も変わらず課題であると感じるのは、セッションがネイティブチェックになってしまうことである。
- ・日本語の添削のような仕方で文章を指摘してしまうことがある。そこで、まず書き手の意図を聞き出すという意識を身につけたい。

この点については、勤務歴の長いチューターと短いチューターの双方から類似した振り返りがなされていた。こうしたチューターの声から、添削と支援の境界線について難しさを感じている様子が窺える。

加えて、構成や内容などの文章全体に対する支援を今後行っていきたいという趣旨の振り返りを紹介したい。複数のチューターが文章の構成や内容といった文章全体に対する検討を行えるようになりたいという考えをもっていることがわかった。

- ・利用者の方が文法や表現を中心に扱うセッションを強く望んでいる場合であっても、他の部分に問題があれば指摘した方が良いと考えているが、実際にはそうすることがなかなかできていないので、今後改善していきたい。
- ・文章構成について検討する機会を増やして行きたい。文章として良いものにしてゆくなれば、文章構成や論理の運びへの検討する視点ももちたい。

・チューターとしては文章全体・構造的な文章検討がもう少し出来ればと思う。

こうした声からは、表現や文法の検討によって日本語としてきれいな文章へと修正する支援だけでなく、文章全体をより良いものにするための支援に関わりたいというチューターの意欲がうかがえる。

②ラボ全体の運営について

2021年度後期のラボ全体の運営について、チューターから多くの意見が挙げられていたのはミーティングに関するものであった。2021年度前期は週1回1時間という方法でミーティングが行われていた。それに対して、2021年度後期のミーティングは、1回の時間を2時間に増やし、回数を全5回にするという方法が取られた。こうした変化の中で、挙げられた意見として、日程調整に関するもの、活動内容、チューター間の課題の共有、学期末ミーティングの必要性の指摘を紹介したい。

ミーティングの回数や時間を再検討すべきという振り返りでは下記のような声が挙げられる。

・ミーティングが定期的に行われたことは良かったと思うが、回数や時間については変更を検討しても良いかもしれない。

・定期ミーティングで人数がとても少ない会があったのが少し寂しかったので、日程調整がもう少しうまく出来たらと思う。最初と最後のミーティングはあらかじめ早くから日程を確定させてできるだけ参加者を増やすなど。

2021年度後期のミーティングでは、日程の都合上、チューター全員が参加することが難しかった。また、参加者がチューター全数のうち半数以下の回があったことから、日程調整について再検討する必要があるようである。

続いて、ミーティングの内容に関する意見を紹介する。

・ミーティングがスキルアップの機会としてよかったが、各曜日の空きコマでも同じことはできそう。なのでミーティングは活動方針や課題の共有などの場として特化させるべきかもしれない。ただし、だとすると、出来るかぎり全員が参加する方が良い。

2021年度後期のミーティングの活動内容はチュータリング能力の向上を図るものであった。活動内容としては有益ではあるものの、勤務日の異なるチューターが集まる機会が十分に活かされていないという声も挙げられた。加えて、「チューター間で悩みや問題を共有することがあまりできなかったように思う。」という声があったことから、チューター間において情報や課題共有のためにミーティン

グを上手く活用していけると良いのではないだろうか。

最後に、学期末ミーティングの必要性を指摘する声を紹介したい。

・学期末や年度末のミーティングは必ず行うべきである。その学期にできたことは何か、できなかったことは何か、次の学期や年度はどうしていきたいかなどを話し合う機会が必要である。

上記の指摘のように、学期末ミーティングを実施し、その学期の振り返りを行うことは、来期の活動につなげるための重要な蓄積となるといえよう。

本節では後期のチューターの内省を元に、チュータリングについてとラボ全体についての振り返りを行った。「チューターとして、自分ができるようになったこと」、「チューターとして、自分ができるようになりたいこと、難しいこと」(課題)を紹介した。「できるようになったこと」としては、セッションでの時間配分に関する声を取り上げた。セッションの冒頭で目標を提案し交渉することで、限られたセッション時間を有効に使用しようと工夫している姿が見受けられた。さらにセッションの終盤にまとめの時間を設けることによって、セッションで検討した内容を振り返り、次の作業へと繋げられるような取り組みがなされている。「できるようになりたいこと、難しいこと」としては、表現や文法の検討が中心となるネイティブチェック中心のセッションになりかねないという難しさや、文章全体の構成や内容はなかなか検討を行うことが容易ではないということがわかった。ラボ全体については、ミーティングのあり方について工夫や再検討が必要だと考えているチューターが数多くいることがわかった。

5. 補論(勤務時間外の有志によるオンライン勉強会について)

本節では、本年度の後期にラボメンバーの有志によって行われた自主的な勉強会について述べる。まず第1項において、実施の経緯と目的を素描し、第2項と第3項において、具体的な活動内容を説明する。そして第4項において、今後の課題について述べる。

①勉強会活動を実施した経緯と目的

本勉強会は当初、ラボでの活動成果を、毎年作成している報告書とは別のかたちで(具体的には大学紀要などへの論文投稿によって)公表することを企図して提案された。このアイデアは教員から提案され、それに関心を持った有志たちと教員で一度会議を行う運びとなった。会議はオンラインで10月28日に実施され、4人のチューターと教員が参加した。

そこでははじめ、論文の投稿先や執筆内容について話し合われたが、議論を経る中で、これまでの活動に関する情報整理や共通見解の構築の方が先に必要であろうとの合意に至った。こうし

た流れで、論文執筆は一旦おいて、ラボ勤務とは別で、有志による勉強会を数回行うことが決まった。

以上のような経緯を経て実施されることとなったオンライン勉強会の目的は、これまでのラボの活動記録を整理し、これまでの活動の問題や今後の課題をまとめることにあった。こうした目的に沿って、活動は学期中に2回行われた。

②第1回活動

第1回の活動は、12月2日にオンラインで実施された。参加者は6人であった。実施した内容は、「過去の活動報告書の内容を改めて読み返し、各年度でどのようなことが議論されていたのかを振り返ること」だった。検討対象としては、2020年度と2019年度の活動報告書が挙げられていたが、実際はほとんどの時間が2020年度報告書の検討に費やされた。

各年の報告書を読む中で参加者の間から挙げたのは、毎年指摘されている活動上の問題点や論点はそこまで変わらないのではないかということであった。つまり、もし毎年同じ問題点が挙げられているのであれば、それらに対して今後どのように対応すべきかがラボの運営にとって肝要である。そうした論点を整理するために、次回の活動では、各チューターが学期末ごとに作成している「振り返りシート」の内容を検討する必要があるのではないかと、というのが当日のひとまずの結論であった。

③第2回活動

2回目の活動は、2022年1月13日にオンラインで実施された。参加者は同じ6人であった。前回の議論を踏まえて、第2回の活動目的は大まかに次の3つであった。(1) 新人チューターの育成だけでなく、継続チューターの育成をどのように考えていくべきかのアイデアを出すこと。(2) 他の大学との意見交換会を実施する場合には、本ラボの特徴や問題点などが説明しやすいように、アイデアをまとめておくこと。(3) 本年度の活動報告書作成のためのブレインストーミングをすること。

具体的な実施内容は次の通りである。(1) 参加者それぞれが、過去に自分が執筆した「振り返りシート」を読み返す。(2) 読み返して改めて感じたことを他の参加者たちと共有し、「振り返りシート」の項目に沿って順番に議論する。(3) そこで話し合った内容を踏まえて、本ラボ全体の問題点を整理する。以上が当日の活動内容である。なおそこでの議論は多岐にわたったが、ここでは紙幅の都合に鑑みて、今後の運営にとって最も重要そうな箇所にしぼって、1点だけ記しておきたい。

議論を進める中で、数人から挙げたのは、「チューターがスキルを積んでこなれていけばいくほど、セッションの中で、全体の文章構造などについては踏み込まず、単語や文法などの具体的な点について取り上げてしまう傾向にあるのではないか」という問題点であった。このことについて

は、過去の振り返りシートでも何度か指摘されているようで、本ラボにとって継続的な問題であるといえよう。さらに他の参加者の中からは、こうした問題がそもそも、本ラボの性質、つまり日本語話者（チューター）が日本語第二言語話者（利用者）の文章を検討するという性質上、構造的に生じているのではないかと、という指摘もあり、ほかの大学との違いを考える上でも検討すべき論点である。またこの点は、新人育成だけでなく、継続チューターのスキルアップを考えるためにも重要であろう。さらに、他の参加者からは、こういった問題を踏まえた上で、改めて「チューター育成とは何か」を考えて、成長やスキルアップのためのフローチャートのようなものを作成することもできるのではないかと、という提起もなされた。

④今後の議論のために

第3回の活動は2月17日に実施される予定だったが、参加者が多忙であることなどを鑑みて中止となった。そこでは、第2回の活動で挙げた問題点を踏まえて、今後の具体的な対応策について資料などを作成する予定であった。しかし、それは、本報告書作成時点（2020年2月下旬時点）ではまだ行われていないので、もし来学期以降も何かしらのかたちで勉強会を継続したり、チューター活動についての振り返りや反省会を行ったりするのであれば、取り組むべき課題の一つであるだろう。

6. おわりに

ここまで、「留学生のための日本語アカデミックライティングラボ」の2021年度の活動について記述してきた。最後に、ライティングラボの運営を担当した教員の立場から、本報告書の記述と、活動の成果および課題について述べておきたい。

第2節で示したように、今年度のライティングラボは新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、前年度から引き続いてオンラインでの活動体制となった。オンライン体制2年目で方法も確立されてきており、前年度から引き続き勤務したチューターが一定数いたこともあり、出だしから安定した運営ができた。

新人チューターの受け入れについては、年度当初から各学期で行うべく動いており、スケジュール作りや研修方法を探りながら進めた一年であった。新人研修で押さえるべき知識については、これまでのラボで蓄積があったが、どのような学習・練習をどの程度、どんな順番でする必要があるか、年度当初はまだまだ見えていないところがあった。次年度は、主に今年度新人研修を体験したチューター4名からの聞き取りをもとに、各学期で新人チューター受け入れを行う場合の方法やスケジュールを改良する必要がある。

定期ミーティングについては、前年度、改めて必要性が見いだされ、継続してきたものであるが、具体的にどのようなスケジュールでどんな活動を盛り込んでいくのが良いか、今年度チューターの振り返りがヒントになると思われる。具体的な活動内容としては、文章チュータリング知識・技能について外部資料を用いて摂取していく活動より、利用者情報の共有や、チューター自身のセッションを手がかりとした相談やすり合わせを主体とする方が良さそうである。

なお、利用者情報の共有は、「まとめシート」でも行っており、定期ミーティングとの重複が問題となってくる。すなわち、「まとめシート」を用いて共有できる情報を定期ミーティングでも共有することは、一見、効果が薄いと考えられる。ただ、「まとめシート」で伝えられる情報は、基本一方向的であり、限定的でもある。ラボは、運営規模としてはとても大きいということはなく、かつ、リピーターの利用者也一定数見られる環境であるので、情報を綿密に共有し、相談し合う体制を取ることができる。これはラボの持ち味・強みとすることができるだろう。

利用者のニーズについては、やはり「セッションの時間が短い」、「もっと長時間セッションをしてほしい」というものが目立つ。この点については、チューターたちとも相談しているが、利用者が非母語話者であるという特性上の問題とも考えられる。また、ラボに関する情報発信や伝わり方という面、もっと言えば、文章チュータリングというコンセプトの認知度の問題である可能性もある。まずは、情報発信の内容や方法を工夫していくのが良いのではないだろうか。

なお、「事前に文章を読んでおいてほしい」という意見も少し見られるが、利用者から文章ファイルを送付してもらうタイミングが早かったことに起因しているのではないかと思われる。オンライン体制下での文章の受け取り方に工夫が必要である。

「利用者のニーズ」、「情報発信」に関連することがらとして、第4.2節で挙げられているように、利用率の時期によるばらつきの問題がある。これについては第一に、利用率の低い時期を極力減らすような取り組みが考えられる。利用率の落ち着いている時期にラボを利用してもらうことは、余裕を持って文章を書き進められることにもつながり、「書き手を育てる」という理念にもつながってくるだろう。ウェブサイトの内容を充実させるという手が考えられる。一方で、学位論文の提出時期が決まっていることを考えると、ばらつきがあるのはある程度当たり前と見るべきかもしれない。利用率の落ち着いている時期に、ラボ内で何かに注力するという手も考えられる。これら両方を意識していく必要があるのではないか。

第4節のチューターの振り返りからは、まず、チューターそれぞれの成長が窺える。経験を重ねるにつれ、1回のセッション全体を落ち着いて見通せる力が付いてきているようであり、利用者との交渉についても、より落ち着いてこなせるようになってきているようである。

ただ、それが十分なところまでは行きついていないという意識も一方であるようである。セッションにおける「目標の再設定」および、検討内容の偏りを課題とする意見が、これまで同様挙げられて

いる。【資料1】に見られるように、ラボではセッションの基本的な流れとして、「目標の再設定」というタイミングを想定している。また、第3節からわかるように、ラボ利用者の申し込みのニーズは、「表現」「文法」が大きい。チューターは、利用者の要望を確認しつつ、文章診断の結果によっては、セッションの目標変更を交渉することが求められている。利用者の「表現」「文法」に対するニーズが強いということと、実際に「表現」「文法」も大きな問題であると考えられる中で、なかなか構成や内容といったところにまで十分には踏み込めていないという葛藤がチューターの中にあるようである。

基本的に、文章診断の結果と当該文章の提出スケジュールを踏まえ、利用者が当初検討したいと思っていた部分よりも先に検討すべき部分があるとチューター側で判断された場合に、「目標の再設定」が必要となってくる。これがどのような場合なのか、今一度整理していく必要があるかもしれない。

ただし、これは文章診断の難しさとも関連する問題であると考えられ、単純ではない。すなわち、利用者が留学生であるという特性上、文章診断そのものに相当の時間を要し、構成や内容の問題発見に至りにくかったり、発見できたとしても相談できる余裕がないというパターンが考えられる。そういった意味では、普段のセッションでどのような時間の使い方をしているか、改めて調査する必要があるかもしれない。

最後に、今後もチューター同士が相談し合いながら主体的に考え、反省・改善を続ける雰囲気が必要であると考えている。そのような雰囲気は、やりがい、やる気、楽しさを担保するものであり、いわば「チューター自身が育つ」ための強い原動力になると考えるからである。第4節の振り返りや、第5節で紹介している有志の勉強会での議論から伝わるかと思うが、ラボはそのような雰囲気のもと運営されてきたと見ている。

【参考文献】

- 井上高輔・梶田真生・森田耕平(2020)『留学生のための日本語アカデミックライティングラボ 2019年度活動報告書』神戸大学国際教育総合センター(<https://g-navi.jp/product/pdf/jawl2019.pdf>) (2022年2月26日確認)
- 佐藤勢紀子・大島弥生・二通信子・山本富美子・因京子・山路奈保子(2013)「学術論文の構造型とその分布—人文科学、社会科学、工学 270 論文を対象に」『日本語教育』第 154 号、pp.85-99
- 佐渡島紗織・太田裕子(編)(2013)『文章チュータリングの理念と実践—早稲田大学ライティング・センターでの取り組み』ひつじ書房
- 松元実環・齊藤優・倉橋佑輔・假谷祥子・下中隆太郎・杉原健・山下泰生・森田耕平(2021)『留学生のための日本語アカデミックライティングラボ 2020年度活動報告書』神戸大学国際教育総

合センター(<https://g-navi.jp/product/pdf/jawl2020.pdf>) (2021年10月12日 修正版) (2022年2月26日 確認)

森田耕平(2019)「兵庫国際交流会館における留学生に対する日本語アカデミックライティング支援—「兵庫国際交流会館における国際交流拠点推進事業」の取り組み」『神戸大学留学生教育研究』第3号、pp.35-60

——(2021)「オンラインでの日本語アカデミックライティング支援—運営・指導の方法とその成果・課題」『神戸大学留学生教育研究』第5号、pp.23-43

G-Navi 「留学生のための日本語アカデミックライティングラボ」

セッション観察・振り返りシート

セッションの日時： 年 月 日 (: ~ :)

チャーター： 利用者：

観察者：

1. セッションの各段階で、チャーターはどんな質問やコメントをしましたか。書き手はそれに対してどのような反応をしましたか。また、そのやり取りはうまくいったか。

セッションの段階	チャーターがどのような質問やコメントをしたか	書き手がどのような反応をしたか/やり取りがうまくいったか
導入 (自己紹介、ウェルカム シートの確認)		
課題の確認・目標設定		
文章診断・目標の再設定		
文章の検討		
まとめ (これから/次回までに することの確認)		

2. セッション全体の流れややり取り、雰囲気について、気づいたこと、感じたことを書いてください。

【資料2】「ラボに関するアンケート」質問項目と回答結果

1. 今日のラボは、役に立ちましたか？

1. とても役に立った	103件
2. 役に立った	46件
3. 分からない	1件
4. あまり役に立たなかった	2件
5. 役に立たなかった	0件

2. チューターとのやりとりを通して、自分の文章に自信がつけましたか？

1. とても自信がついた	31件
2. 自信がついた	111件
3. 分からない	7件
4. あまり自信がつかなかった	3件
5. 自信がつかなかった	1件

3. 今日のラボではやりたいことができましたか？

1. 全てできた	34件
2. だいたいできた	75件
3. 分からない	2件
4. あまりできなかつた	3件
5. できなかつた	0件

4. チューターの指示や説明は理解できましたか？

1. よく理解できた	137件
2. だいたい理解できた	15件
3. 分からない	1件
4. あまり理解できなかつた	0件
5. 理解できなかつた	0件

5. あなたの希望(してほしいこと)や意図(したいこと)は、チューターに伝わりましたか？

1. よく伝わった	112件
2. だいたい伝わった	40件
3. 分からない	1件
4. あまり伝わらなかった	0件
5. 伝わらなかった	0件

6. ラボの改善点や、チューターにしてほしいことなどがあれば書いてください。

- 時間が短いと感じる、もっと長くしてほしい、事前に文章を読んでおいてほしい旨：16件
- お礼や、引き続き利用したい、特になしという旨：28件
- セッション中、もっとチューターに誘導してほしい旨：2件

【資料 3】

留学生のための日本語アカデミックライティングラボ ウェルカムシート		
予約日時		
利用者名		
メールアドレス		
今学期、ラボを初めて利用するか		
文章の種類		
文章の情報	文章のタイトル	
	文章の長さ	
	提出締切日	
文章の段階		
セッションで検討したい点		
	その他	
セッションの記録への同意		
その他特記事項（チューター記入）		
初回利用者情報		
性別		
国籍		
住所		
大学		
所属学部・研究科		
課程		
学年		
専門分野		
電話番号		
ラボ認知経路		

【資料 4】

留学生のための日本語アカデミックライティングラボ まとめシート		
セッション日時		2021年 月 日() : ~ :
利用状況	利用者	
	チューター	
	予約	あり/なし
使用言語		日本語/ほとんど日本語/ほとんど英語/英語
文章の問題点と検討の内容		
文章全体の骨格	ブレインストーミング/ アウトライン	
	文章全体のテーマや問い	
	構成と構成要素	
段落や文の関係	パラグラフ・ライティング	
	内容（複数の事柄の関係/ 段落や文の抽象度）	
	接続表現	
一つの文や単語の問題	キーワード/語句の明確さ	
	学術的文章表現	
	一文一義/主述のねじれ/ 文の長さ	
	その他の文法的事項	
	引用・参考文献	
	その他	
引継ぎ事項		
○指導の補足：どこまで検討したか、次回はどこから始めるか、あと何回来られるか、教員からの指示など		
○書き手の能力・意識：日本語や書き方のレベル・特徴、書き手自身が苦手・不安に思っていることなど		
○書き手の個性・姿勢：意欲的か、積極的に意見を言い出すかなど		
○その他		
セッション観察フィードバックを受けた時のメモ		
○気づいた点・所感		

※最下段の「セッション観察フィードバックを受けた時のメモ」欄は、今年度後期開始時に設けたものである。後期は、元からあるバージョンとこちらのバージョンが適宜使用された。

留学生のための

オンライン

日本語アカデミック ライティングラボ

JAPANESE ACADEMIC WRITING LAB FOR INTERNATIONAL STUDENTS

日時

2021年

5月31日～8月13日

毎週 月・火・金 曜日

① 16:00～16:45

② 17:00～17:45

③ 18:00～18:45

対象

兵庫県下の大学等の留学生で、
日本語で学術的文章を書く人留学生の **日本語ライティング** をサポート！日本語の学術的文章の書き方を、日本人大学院生
チューターが1対1でアドバイスします。

【サポートする文章】

日本語の授業の作文／講義・演習のレポート／論文（学位論文、
投稿論文）／プレゼンの資料／その他の文章（研究計画書など）※エントリーシート・履歴書などは扱いません。
※文章の添削サービスではありません。

詳細・予約フォームはこちら

<https://g-navi.jp/project/03/jaw102f/index.html>

- This program aims to support international students who write academic papers in Japanese.
- Tutors work with you in 45 minute one-to-one sessions to improve your paper/writing.
- Sessions will be done mainly in Japanese but we also welcome elementary-level learners who write Japanese sentences.
- If you would like to get advices on your paper written in Japanese while speaking English, please contact us above. We will suggest suitable session for you.

実施方法

Zoomを使用したオンラインサポート（1回45分）

利用方法
・
注意事項

1. 上のフォームに必要事項を入力して予約してください。
2. 何度でも利用できますが、予約は一度に一回だけです。
3. セッションは1日1回（45分）までです。
4. 日本語で書いた文章のファイル（Wordなど）を準備してください。
5. Zoomを使用します。ネット環境やカメラ、マイク、スピーカーを準備してください。
※詳細については、ホームページおよび予約後の案内メールを確認してください。

問い合わせ

神戸大学国際教育総合センター 井上高輔 INOUE Kosuke
k-inoue@person.kobe-u.ac.jp Tel: 078-803-5280

留学生のための

日本語アカデミック ライティングラボ

オンライン
無料

JAPANESE ACADEMIC WRITING LAB
FOR INTERNATIONAL STUDENTS

2021 2022
11/5 (金) ~ 2/8 (火)

毎週 月・火・金 曜日

- ① 16:00 ~ 16:45
- ② 17:00 ~ 17:45
- ③ 18:00 ~ 18:45

対象：兵庫県下の大学等の留学生で、
日本語で学術的文章を書く人

留学生の **日本語ライティング** をサポート！

日本語の学術的文章の書き方を、日本人大学院生
チューターが1対1でアドバイスします。

【サポートする文章】

日本語の授業の作文 / 講義・演習のレポート /
論文（学位論文、投稿論文） / プレゼンの資料 /
その他の文章（研究計画書など）

- ※エントリーシート・履歴書などは扱いません。
- ※文章の添削サービスではありません。

- This program aims to support international students who write academic papers in Japanese.
- Tutors work with you in 45 minute one-to-one sessions to improve your paper/writing.
- Sessions will be done mainly in Japanese but we also welcome elementary-level learners who write Japanese sentences.
- If you would like to get advices on your paper written in Japanese while speaking English, please contact us above. We will suggest suitable session for you.

実施方法：Zoom を使用したオンラインサポート (1回 45分)

申込方法：フォームに必要事項を入力してください。

<https://g-navi.jp/project/03/jawl211/index.html>

利用方法：1. 上のフォームに必要事項を入力して予約してください。

2. 何度でも利用できますが、予約は一度に一回だけです。

3. セッションは1日1回 (45分) までです。

4. 日本語で書いた文章のファイル (Word など) を準備してください。

5. Zoom を使用します。ネット環境やカメラ、マイク、スピーカーを準備してください。

※詳細については、ホームページおよび予約後の案内メールを確認してください。

問い合わせ：神戸大学国際教育総合センター 井上高輔 INOUE Kosuke

k-inoue@person.kobe-u.ac.jp Tel: 078-803-5280

